

☆☆文庫あれこれ☆☆

◆急に涼しくなりました。おまけに悪天候が続いています。◆9月初め10日ほど、山陰に遊びました(全国的なおはなし会参加のついでです)。◆松江・玉造温泉に始まって、隠岐三島、石見銀山。その間に松江城、足立美術館、出雲大社も駆け足で。次号に写真つきで、もうちょっと詳しい旅行を書ければ、と思います。



◆すみません。今年は何度か開館日変更をお願いします。開館スケジュールをご覧いただいております。学校を卒業して50年経ちました。その関係で大小の集まりがいくつかあり、まあこんなことも最後だと思うので出席しようかと。◆それから、ご不便をにかけている駐車場の件でまた確認をお願いします。文庫の駐車場は3台だけです。これを増やす財力はありません。それで、前のグラナダさんにご好意で、土曜(2時~5時pm少し前)と、日曜(午前11時少し前までと、2時~3時pm)をお借りしています。他所にいろいろお願いしてみましたが、お許しはいただけませんでした。やむを得ず車道(文庫わきの大通りは×)に停められる場合は、スタッフに一言お声をかけください(駐車をお願いカードを車の前に出すようにしたいと思います)。◆10年誌、読まれましたか? 寄稿して下さった方々の感想や読書リストを読んで、読みたくなった、とおっしゃる方が多いのに喜びを感じています。みなさん、ありがとうございます。◆今日23日の文庫は、もや(きり?)の中、青空が待ち遠しいですね。◆いま、夕間に、虫が鳴き始めました(西村)。

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

お詫び: さ・らの都合で、今月の他、10月、12月の開館日も下記に変更になります。ご留意ください。

- ◆10月に変更第4週 22(土)、23(日)の両日
- ◆11月は通常19(土)、20(日)の両日
- ◆12月に変更23(金・祝)、24(土)

★クリスマスおたのしみ会は23日の午前(10:30~11:45)です。300円程度のプレゼントを持ってお出かけください。★★

- ◆2017年1月は通常14(土)、15(日)の両日
- ◆2月は通常18(土)、19(日)の両日

文庫の時間は土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

◆毎月開館日の日曜には、子どものための小さなおはなし会があります。

午前10:30~11:00

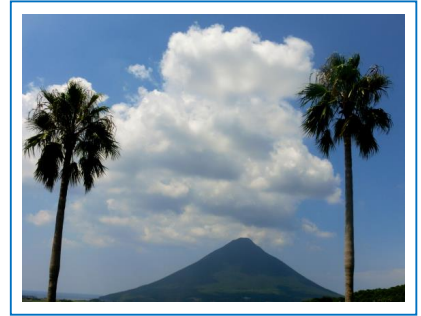
◆おはなし文庫の勉強会 毎月開館土曜日 11:00~13:00 読みかかせの練習・本選の勉強にもどうぞ



沙羅の樹文庫 0557-51-3737
<http://www.saranokibunko.com>
伊東市大室高原7-122

(2016年9月号)

沙羅の樹文庫だより No.121



開聞岳と9月の空 (西村夫撮影)

ある日ある時

秋の空が青く美しいという
ただそれだけで
何かしらいいことがありそうな気がする
そんなときはないか

空高く噴き上げては
むなく地に落ちる噴水の水も
わびしく消えはなれる一枚の落ち葉さえ
何かしら喜びに踊っているように見える
そんなときが

『黒田三郎詩集 支度』(岩崎書店)より

先日、孫たちの文化祭に行ってきました。それぞれ学校色が出ていて面白かったです。特に課外書道で、少女たちが袴をたくし上げ大きな筆でバケツの墨で一斉にひとつの詩を書きあげる様に感動しました。このお天気では運動会は延び延びのところが多いですね。

2016年9月に読んだ本についての感想 2016.9.22 by 森林浴

『石川啄木』 ドナルド・キーン著 角地幸男訳 新潮社刊 2016年6月第4版

この375頁の本を読み終えて、しばらくは茫然としていた。啄木の人生、たったの27歳でこの世から去った短い一生—なんと苦勞と苦惱と、しかし輝きに満ちたものだったのか。キーンさんは啄木が遺した日記を丹念に愛情をこめて辿って書いてくれた。それこそが当時の日本は結核が悪魔のように蔓延して人々の命を奪って行った。かつてこの感想文シリーズで小川国男の「弱い神」という本のことを書いたことがある。其処でもみんな結核で次々に死んでいったのだが、啄木の場合本人も、妻の節子も、老母も子供たちも皆結核で亡くなっていったのです。まさに国民病。その原因は貧困—貧しい生活で貧しい食事、結局、栄養失調ですね。またこの本で啄木の一生は借金生活の連続だったことが分かる。もちろん住むのはすべて借家。

—「はたらけど はたらけど猶 わが生活(くらし)楽にならざり ちっと 手を見る」—
今啄木を読もうとする人はどれほどのいるのだろうか?

『蔡永文 新時代の台湾へ』 蔡永文著 前原志保監訳 白水社刊 2016年6月第1版

この本は2016年5月に国民党に打ち勝った民進黨の党首として中華民国(台湾)初めての女性総統に就任した蔡永文が総統選挙寸前の4月に出版した本(言ってみれば、立候補宣言)の翻訳。読んだ感じでは、彼女はすっきりと筋が通り、学者みたくに真面目な政治家で、素晴らしい人だなという印象を受けたが、政治の世界は怖い。8月5日の朝日新聞によると、彼女の民進黨政権はスタートしたものの、主要人事や政策が暗礁に乗り上げ、中国との関係も膠着状態に陥って、新政権の支持率も低下傾向だ、とのことである。私などが一番気になるのが、中国との関係をどうするかだが、奇妙なことに、この本を読む限り、对中国の政策・方針については、殆ど言及がない。台湾には何度か行ったことがあるし、その親日的な国民性にはとても好感を持っているが、やはり、对中国をどうするか、どうなるのか、が一番大事な点。(できれば中国と縁を切って、完全独立国になればよいのだが、それは夢想! — 残念だ

『属国 民主主義論』 白井聰・内田樹 著 東洋経済新報社刊 2016年7月初版

安倍晋三嫌いの二人が言いたい放題を言っていて痛快。この本は若手の白井聰さんが中心になってできた本かと思っていたが、読んでみると内田樹氏がむしろリーダーシップを取っているという印象を持った。まあ内田さんの方が全般的に知識・経験があり、優れているということが出ただけなのか。それにしても、「私は立法府の長」なんて国会で放言したりするお粗末君、お二人が忌み嫌う安倍晋三さんがなぜ今政治の世界でやることなすこと成功を収めて圧倒的な権力を振るっているのだろうか。彼は不思議なこと、小泉政権で官房長官をやっただけで、普通の大員ポストにはついたらいいことではないのである。現状から見れば、「民進党」が依然頼りない現状では彼は自民党のトップとして今後も選挙をやるたびに勝ちつづけ、ご希望の憲法改正も実現し、自分の主張を好き放題に実現させて、歴史のこの大政治家として記録される可能性が高い! パカツキとはこのこと。このままでは白井さんたちの杞憂しているような、対米従属の「属国民主主義論」日本が続くのだろうか。

『スクープ』 イーヴリン・ウォー著 高橋進訳 白水社刊 2016年6月第1版

やはり伝統あり、厚みのある英国の小説は素晴らしい(一昔前は学校では英語のTextとしてみんなサマセット・モームを読まされたものでした。個人的にはグレーム・グリーンなども好きですが) この小説は1938年に発表されたということで、つまり昭和13年だから、かなり古い作品。ギッシリつめた印刷で288頁あり、登場人物は多いし、カタカナの地名などがいっぱい出て来るので、読むときはメモ帳でも使って整理して行かないと頭が混乱して訳が分からなくなる危険がありますね。しかし文句なしに面白い。筋は、新聞記者だが、のんびりした田園だよりなどを寄稿していた牙えない男ブーツが、間違えて複雑で大規模な国際事件の特派記者に指名されて、アフリカの某国(想定はエチオピアらしいが)の首都に派遣されて何が何だか分からないでオタオタし

ている。ところが他社の記者連中が、ある情報から大事件がありそうという奥地に揃って出かけた時、主人公だけがたまたま首都で、あるドイツ女に惚れたはれたでもたもたして、一人置いていってしまった。ところが一人残された首都で大事件が発生して、残された男が他社を出し抜いて大スクープ記事を連発するという抱腹絶倒の喜劇である。当時の本社への連絡方法は電報しかなく、その電報文面がまた面白く滑稽で、笑われる。なにしろ男の名前がブーツ(長靴)新聞社の社名がピースト(猛獣)というのですから著者のおふざけも一通りではなく、その文章力は凄い。また英国特有の貴族が登場して滑稽度が加速されていますよ。この小説は2003年に「英国の新聞「ガーディアン」紙上で「古今の名作小説100」に選出され、さらに2014年「テレグラフ」紙上で「絶対必読の小説100」に選出されたという。ともかくこの著者の小説技術は抜群。読む価値あり。



『日露戦争史 1・2・3』 半藤一利著 平凡社刊 平凡社ライブラリー 2016年4月第1版 現在読み進め中です。やけに面白い本のようなのですが。

16年9月に入った子どもの本

絵本

『ぐりとぐらのあいうえお』(ながかわりえこさく やまわきゆりこえ 福音館書店) ID12132
 『ぐりとぐらのおまじない』(ながかわりえこさく やまわきゆりこえ 福音館書店) ID12133
 『ピンクだいすき』(ピレット・ラウドぶん・え まえざわあきえやく 福音館書店) ID12140
 『ぐやんよやん』(長谷川摂子ぶん ながさわまさこえ 福音館書店 2016) ID12141
 『はだしになっちゃえ』(小長谷清美ぶん サイトウマサミツえ 福音館書店) ID12142
 『太陽をかこう』(ブルーノ・ムナーリ作 須賀敦子訳 至光社) ID12143
 『木をかこう』(ブルーノ・ムナーリ作 須賀敦子訳 至光社) ID12144
 『あかいふうせん』(イエラ・マリ作 ほるぷ出版 2016・55刷) ID12145
 『きりのなかのサーカス』(ブルーノ・ムナーリ作 谷川俊太郎訳 フレーベル館) ID12146
 『ひともじえほん』(こんどうりょうへいさく かきのきはらまさひろこうせい やまもとなおおきしん 福音館書店) ID12147
 『とんがとびんがのプレゼント』(西内ミナミさく スズキコージえ 福音館書店) ID12148
 『ひまなこなべアイヌのむかしばなし』(菅野茂文 どいかや絵 あすなろ書房 2016) ID12149
 『ブーさんとであった日』(リンジー・マティックぶん ソフィー・ブラッコールえ 山口文生訳

評論社 2016) ID12150 ★ブーさんはほんとにいた!
 『あかいぼうしのゆうびんやさん』(ルース・エインズワースさく こうもとさちこやく・え 福音館書店) ID12151
 『くつやのドラテフカーポーランドの昔話』(ヤーナ・ボラジンスカ文 足達和子訳 ワンダ・オルリンスカ絵 福音館書店 2015) ID12152

よみもの

『こうちゃん』(須賀敦子文 酒井駒子画 河出書房新社) ID12153
 『ハルとカナ』(ひこ・田中作 ヨシタケシンスケ絵 講談社 2016) ID12154
 『きみは知らないほうがいい』(岩瀬成子作 長谷川集平絵 文研出版) ID12155
 『くらやみの谷の小人たち』(いぬいとみこ作 福音館文庫) ID12156
 『びんの悪魔』(R・L・スティープンソン作 よしだみどり訳 福音館書店) ID12157
 『愛蔵版ピーター・ラビット全おはなし集』(ピアトリクス・ポターさく・え いしいももこ、まさきりこ、ながかわりえこやく 福音館書店) ID12159※1 作ずつ夜寝る前に読んであげよう。
 『レッド・フォックスーカナダの森のキツネ物語』(チャールズ・G.D.ロバーツ作 桂育子訳 福音館書店) ID12158
 『ミスターオレンジ』(トゥルース・マティ作 野坂悦子訳 朝北社 2016) ID12164※版元寄贈

ノンフィクション

『やまのとりⅡ』(数内正幸ぶん・え 福音館書店) ID12161
 『トイレのおかげ』(森枝雄司写真・文 はらさんべい絵 福音館書店) ID12162
 『野あそびずかん』(松岡達英さく 福音館書店) ID12163
 『ポケットパズル』(すぎやまあきら作 福音館書店) ID12160

おかあさんおとうさん、おぼあちゃんおじいちゃんに:

子どもにどんな絵本をと迷ったら・・・。
 文庫に入って正面の棚右端(ピンクのラベル)には子どもの本のリスト類がたくさんあります。著者は、専門家からいつも子どもに接している文庫のおばさんまで、様々ですが、その中から何冊かご紹介しませぬ。
 『絵本で楽しむ子育て』(草谷桂子著 大月書店) 静岡 ★おじいちゃんが孫に接するときに役立つ役立ちます。
 『絵本ありがとう』(足立茂美著 今井出版) 鳥取 ★このリストに載っている本はほとんど文庫に入っています。そしてつい先日著者からあらたな『絵本で出会った子どもたち』をいただきました。子どもと絵本を読むとき、さらに深い感動が得られると思います。あわせてチェックしてみてください。
 『あかちゃんの絵本箱』(こどもと本一おかやまー「あかちゃんの絵本箱」編集委員会編 吉備人出版) 岡山 ★岡山の文庫の仲間とあかちゃんとの長い経験の中から生まれたリスト。ここまでは地方発信の本です。
 『絵本が目さますとき』(長谷川摂子著 福音館書店) ★『きよだいなきよだいな』や『めっきらもっきらどおんどん』の作者、そして文庫のおばさんだった著者の本。
 ※視点や表現は違ってもおかあさんとして先輩として子どもをやさしく見てきた人たちのお薦めリストです。

16年9月に入ったおとなの本

フィクション

『三の隣は五号室』(長嶋有著 中央公論新社 2016) ID16811
 『帰郷』(浅田次郎著 集英社 2016) ID16812
 『東京會館とわたし』(辻村深月著 毎日新聞出版 2016) ID16813
 『アンマーとほくら』(有川浩著 講談社 2016) ID16814
 『罪の終わり』(東山彰良著 新潮社 2016) ID16815
 『コドモノセカイ』(岸本佐知子編訳 河出書房新社 2016) ID16816
 『供述によるとペレイラは……』(タブッキ著 須賀敦子訳 白水社) ID16817
 『あたらしい名前』(ノヴァイオレット・ブラワヨ著 谷崎由依訳 早川書房 2016) ID16818
 『チェロを弾く女』(ギィ・フォワシ作 新水館) ID16819※request

フィクション以外

『須賀敦子の手紙 1975-1997 友への55通』(須賀敦子著 つるとはな 2016) ID16820※request
 『カテリーナの旅支度』(内田洋子著 集英社 2013) ID16821
 『不機嫌な作詞家一阿久悠日記を読む』(三田完著 文藝春秋 2016) ID16822

『魂の退社』(稲垣えみ子著 東洋経済新報社 2016) ID16823
 『ははがうまれる』(宮地尚子著 福音館書店) ID16824
 『ハチドリの一としく』(辻進一監修 光文社) ID16825
 『死すべき定め一死にゆく人に何ができるか』(アトゥール・ガワンデ著 原井宏明訳 みすず書房 2016) ID16826
 『翻訳できない世界のことは』(エラ・フランシス・サンダース著 前田まゆみ訳 創元社 2016) ID16827※なぜかベストセラーです。

『世界史としての日本史』(半藤一利、出口治明著 小学館新書) ID16828
 『ふるさとの民話 第15集 隠岐編3 (さんいんの民話シリーズ)』(酒井董美著 ハーベスト出版 2016) ID16829
 『佐治谷話のルーツを探る 増補版』(有本喜美男著 『佐治谷話のルーツを探る』刊行会 2015) ID16830※滑稽話満載

寄贈

『末吉正子の語り(新しい日本の語り 11)』(日本民話の会編 悠書館 2016) ID16831
 『絵本で出会った子どもたち〜心が育つ瞬間をみつめて』(足立茂美著 今井出版 2016) ID16832 ※以上2冊各著者より
 『米原万理ベストエッセイ1&2』(角川文庫) ID16834~5 『雪と珊瑚と』(梨木香歩著 角川文庫) ※以上3冊Mさんから

文庫

『すずの爪あと』(乃南アサ著 新潮文庫 2016) ID16806
 『にんじん』(ジュール・ルナール著 窪田般彌訳 角川文庫) ID16807
 『なぜ古典を読むのか』(イタロ・カルヴィーノ著 須賀敦子訳 河出文庫) ID16808
 『美味礼讃 上・下』(プリア・サヴァラン著 岩波文庫) ID16809~16810 ※request

須賀敦子作品をまだ読んでない方、読んでみませんか!

今回あらだに入った本

<大人の本>

『須賀敦子の手紙 1975-1997 友への55通』 ID16820
 『供述によるとペレイラは……』(タブッキ著) ID16817
 『なぜ古典を読むのか』(イタロ・カルヴィーノ著 河出文庫) ID16808
 <子どもの本もあるんですよ>
 『こうちゃん』 ID12153(須賀唯一の童話)
 『太陽をかこう』(ムナーリ作) ID12143(絵本)
 『木をかこう』(ムナーリ作) ID12144(絵本)
 ……………

すでに文庫にある本

『須賀敦子全集全8巻』 ID6470~6477
 『ヴェネツィアの宿』 ID5776
 『時のかけら』 ID6257
 『トリエステの坂道』 ID6231
 『霧のむこうに住みたい』 ID16051、ID16428
 『ユルスナールの靴』 ID16714
 『精選女性随筆集9 須賀敦子』 ID15125